

2012年度龍谷大学人権問題研究委員会助成研究プロジェクト
中間報告書

『沖縄における階層格差と人権』

研究代表者

社会学部准教授 岸政彦

共同研究者

社会学部教授 青木恵理子

社会理論・動態研究所 打越正行

大阪市立大学院 上原健太郎

沖縄的共同体の外部

打越 正行

社会理論・動態研究所

1 はじめに

本稿は、沖縄的共同体の外部に生きる若者たちのモノグラフである。筆者は2007年から沖縄の暴走族、ヤンキー¹⁾の若者を対象とした参与観察を継続し、集中的に166名の若者にインタビューを実施した。その調査終了後も調査対象者たちの集団に混じって参与観察を継続し、2013年の現在でも、20代前半から30代前半までの世代の沖縄の元暴走族、元ヤンキーの若者と交流を重ねている。当時、バイクに乗って暴走し、それを見物していたヤンキーの若者たちは、現在ではサラ金²⁾の回収業、台打ち³⁾、性風俗店の経営、型枠解体業、鳶⁴⁾、塗装、キャバクラ⁵⁾、おっぱブ⁶⁾の女性従業員、バイク屋、弁当屋、ホスト、主婦となった。彼・彼女たちの労働現場や生活世界は過酷である。多くの者が転職を繰り返し、給料遅延・未払い、暴力沙汰など、トラブルは絶えない。

本稿では、これらの若者たちの生活のモノグラフを通じて、沖縄における階層格差と共同性との関係について考察をおこなう。

「沖縄的共同性」については、社会学的先行研究のなかで何度も言及されてきている。それは、沖縄の人びとを温かく包摂し、厳しい経済状況から守る、ある種の「保護膜」のようなものとして描写されている。それは、沖縄特有の地縁・血縁にもとづく、「互恵主義」を特徴とする共同体である。

例えば、通常は、沖縄社会での学歴・職歴のキャリア形成においても、「沖縄的共同性」が重要な役割を担う。キャリア形成のプロセスでは、たとえば地元の年長の「先輩」の経験が蓄積されており、先輩のモデルケースや成功／失敗談が年下の「後輩」に伝達される。こうした先輩のことは、ウチナーグチ（沖縄方言）で〈シージャー〉（兄貴分）、後輩のことは〈ウットウ〉（弟分）と表現される。シージャーとウットウの関係は、時としてシゴキやイジメを含むものであるが、それは基本的には「上を尊敬し下の面倒をみる」という互恵性によって維持される関係である。本稿では、地縁・血縁などから構成される沖縄的共同性のなかでも特に、この「先輩／後輩」関係に注目したい。

しかし、沖縄の社会学的先行研究でしばしば強調されるそのような共同体は、ある程度の「生活資源」の支えがあってこそ機能する。本稿で紹介する沖縄の下層／不安定層の若者たちの過酷な暮らしのなかでは、そうした「先輩／後輩」の関係性も、壮絶な暴力と搾取をとまなう厳しいものになりがちであり、また家族や親族といった他の共同体的な資源も生活の助けとはな

らない。つまり、沖縄的共同性は沖縄社会のすべての人びとをカバーしているわけではなく、そこには階層間格差が存在するのである。下層／不安定層の若者たちにとって、沖縄的共同性は必ずしも生活を扶助してくれるものであるわけではなく、むしろ彼らはその外部にあって、剥き出しの暴力的な上下関係のなかに縛り付けられているのである。

以下では、そのような沖縄的共同体の外部に生きる若者たちの生活を記述する。その作業を通じて、階層格差と共同性との複雑な関係を再考する手がかりとしたい。

2 調査概略

本稿で主に取り上げるデータは2012年の7月から9月にかけての2か月間にわたり実施した参与観察がもととなっている。この参与観察は2007年に深夜のゴーパチ（国道58号線）で暴走する若者たちに、休憩中のコンビニなどで声をかけて関係を蓄積できたことから始まった。その後筆者は、バイク倉庫や、活動の拠点である「アジト」（暴走族のOBがたまり場にするために借りたガレージが、仲間たちからこう呼ばれていた）に出入りを許されるまでになった。その過程で筆者は、いわゆる「パシリ」の役割を積極的に担うことで、新参加の中学生と同様の手順を経て「アジト」にたむろする集団への参加が認められるようになった。具体的には、買い物、バイクの研磨、倉庫の清掃、レジャー時の運転手などである。参与観察中には適宜、生活史インタビューも実施した。こうした関係性に基づき、毎年定期的に沖縄に通い、この集団への参与観察を続けている。本稿は2012年の夏にあらためておこなった集中的な調査の結果をまとめたものである。

ここで中心的に紹介するのは、「アジト」出身のメンバーの、太一と上地の2人の男性である。詳しくは以下で述べるが、2人とも同じ地元出身の〈シージャー〉（先輩）／「ウットゥ」（後輩）の関係にある。なお調査期間は2か月間であるが、上地とは2007年から継続的にインタビュー調査を行ってきた。また太一は今回初めてお会いしたが、筆者が彼の地元のメンバーの多くと調査継続中であることから、すでに地元でも有名な「暴れ者」として、間接的に太一の話を知っていた。

調査の方針は、可能な限り、調査対象者たちの相互作用にともに参加し、日常生活をともに送ることで、対象者たちの生のコミュニケーションのあり方を直接体験させてもらうことを重視した。本稿で登場する若者の名称はすべて仮名である。また本人が特定されないように人物に関する情報は、一部で曖昧にしたり、変更を施している。

3 距離化・裏切り・「男の強さ」——〈シージャー〉たちの視点から

3.1 太一

太一は、沖縄のある地域で生まれ育った 30 歳（2012 年当時）の男性である。母親はかつて飲み屋で働いていた。父親はかつて暴力団の構成員であり、現在は鶴見で人夫貸し⁸⁾をしている。彼は、おじさんの建築会社に勤めている。彼は一人っ子であり、両親は太一が 3 歳の時に離婚した。高校時代の同級生の女性と 18 歳で結婚し、19 歳の時に男の子が生まれた。その 1 年後に次男、4 年後に長女が生まれた。

しかし結婚生活 11 年目の 2012 年夏、太一は夫婦げんかの末、別居した。そして、同じように離婚後に単身生活を行っていた同級生の中里のアパートで、太一は同居生活を始めた。繁華街のなかにあるマンスリーアパートは男性 2 人が住むには少し狭いが、同級生でしかもお互い別居状態にある二人の生活は順調に滑り出した。友人たちは繁華街からのアクセスのいい中里のアパートに頻繁に泊まり、同世代のたまり場となっていた。

しかし、同年 11 月の調査時にはこの共同生活はすでに終わっていた。2 人で酒を飲んでいて、中里が太一に「お前、でかい顔すんな、出ていけ」と言い放ち、その結果、中里はベッドの上で太一から暴行を受けた。中里の顔面は原形をとどめていないほど腫れあがり、痣だらけになった。警察がアパートへ駆けつけたものの、太一は前科があり、傷害事件になれば確実に実刑になるため、中里は被害届を提出しなかった。そして 2 人の共同生活は終わりをむかえた。

3.2 数々の「武勇伝」

太一は建築現場で働きながら、格闘家としても活躍している。練習はほとんどしてないため粗削りであるものの、派手な試合展開にファンは多い。そのような彼を紹介するにあたり、欠かせないのが数々の「武勇伝」である。

那覇のクラブでもやったよ。高校の友だちとよ、クラブ行って、女しかしてた（ナンパしてた）わけさ。相手方の方から、ギャングみたいなもんも、ギャングみたいな男もいたらしい。[沖縄の方ですか?] 沖縄の方、もう覚えてんよ（覚えてないよ）、ぜんぜん 18（歳）くらい自分、「おーい」ってから飲んでてから、女も「おーい」って飲んでてから、酔っぱらってるから、ギャングのみー（ところ）にもすぐちゃーひきーよ（急に雰囲気盛り下がったのよ）、「おーいー」、年上だはずよ、肩組んでから「おーおーいー」ってしてるから、ちょっとしたら、なんか変な空気になってるのも気付かず、わー（俺）友だちと思って、「お、トイレ行こうぜー」じらー（みたいに）言われて、トイレいったわけ、したらトイレ行ってしょんべんしてたわけ、「おい、おまえこい」って、くすまるみー（大便するところ）があるさー。[はい] しょんべんしてたけど、「お前こっち来い」ってから、一人がよ

んでから、カチャって、あんな狭いみー（場所）でよ、「やー（おまえ）なんのつもりかー」ふーじー（みたいな）、なんかかしこまって、なんか、なんでよ楽しく飲んでるさあ、なんとかなんとかさーって言って、「やー調子のるなよ」ふーじーじゃない、たぶんよ、覚えてんけどよ、そしたらそしたで、ゴーサイン始まりました。ファイト！ファイと思うさ、あったー（あいつら）もきたないぜ、一人でできないと思ったんじゃない、5・6名入ってくるばーて、ぶおーって、くすまるみーによ、おーもう滅茶苦茶よ。[狭いのになえ]でも、5・6名入っても関係ないよ。たっくわいん（くつついてきて）、暴れるだけ暴れてよ。ドアもぶっ壊して、ばんない（どンドン）よ、せっ、このクラブの店員に「おいおいこっちでやるんじゃねえぞ、おい」って、引っ張られて、エレベーターで1階におろされました。下に行ったら、もう何十名もいるよ、くったー（そいつら）とも、ばーるないやってからよ、やったよ、相手も血まみれになってるのもいるよ、1対15ぐらい。で、俺なんか友だちは3名と、俺なんかは3名でクラブに来てたわけ、俺なんか友だちは「すいません、すいません」って謝ってから、この友だちの一人、鼻折られてるばーよ、鼻も折られて、血まみれ。

（同上）

クラブのトイレで他の客およびその連れと集団で殴り合いになるといった類の繁華街でのトラブルは、この他にも筆者の知るかぎり4、5件ある。このため地元では有名な存在となっている。

上地「（繁華街で太一さんが歩くと）まわりに誰もいなくなっていました」

太一「がんまりで（ふざけて）やるか（暴れるか）って言ってから」

打越「キャッチ（客引き）がキャッチしない男（笑）」

太一「あ、中里、がんまり（冗談）でよ、キャッチがキャッチしないはずなあってから、わー（俺）が、がまく（腰）蹴ってますかあって、蹴っ飛ばしたばあよ。してからみんな平気だった」

（中里のアパート、2012年8月15日）

3.3 裏切りの世界を生きる

ある日、街で有名な太一、太一と同居する中里、先輩の譲司、キックボクシング沖縄チャンピオンの慶太たちと、地元の居酒屋でお酒を飲む機会があった。その店でも太一は暴れた「前科」があり、にぎやかな1階ではなく、誰もいない2階の個室で宴会は始まった。太一たちは

過去に泥酔して暴れて店を破壊したことがあったために、われわれは人のいないエリアに「隔離」されたのである。私を除いて、このメンバーのなかでは、〈シージャー〉の譲司、そして太一と中里が30歳で続き、慶太が〈ウットゥ〉であった。慶太は太一とかつて殴り合いのケンカをしており、鼻の骨を折られたことがある。ただそれをきっかけに慶太は格闘技をはじめ太一をいつか倒そうと懸命に練習に励んでいる。譲司は格闘技大会の企画に携わっており、太一と慶太からその年齢差以上に尊敬の念を抱かれている。ただ年に一度のエイサーのうーくい（最終日）であったこの日は、少しいつもとは様子が違った。泡盛を飲み過ぎた慶太の酒癖が出てしまった。飲み始めてから1時間にわたりずっと中里にからみ続ける慶太に対して、太一がとうとう激怒した。彼はそのとき激怒したのは演技だったと後から打ち明けたが、それを知らない慶太は酒癖が抜け、落ち着きを取り戻して話した。

譲司「信用しれ俺を」

慶太「誰も信用しない、わかってる、どうせ信用したら負ける」

……

譲司「あんち（あんなに）、こんなってやってるの、やあ、こんなしょぼい人間なったら終わりだよ、はっきし言って」

中里「もっと心をでっかく持て」

慶太「わかってるそんなの」

……

中里「でもやーも信用しないと、要は、好きなむん（人）だったら」

慶太「ううん絶対しないよ、一人で生きていくのに、ずっと決めてたのに、だったさずっと、一人で生きてくって、ずっと決めてたから、それはあるよ」

中里「じゃあ、ひとりで生きてくって、わー（俺）はなんか？」

慶太「友だち、友だち、みんな友だち、決めてくって決めたから」

打越「信用はしてないんですか？」

慶太「ううん、信用とか、そりゃあみんな裏切りってありますよ、友だちって、やっぱあります。けどお互いに、信用ってあります？お互いに」

太一「あるさあ、だから」

慶太「どんなふうっす、それ聞きたいっす」

太一「だからこんなって深く一緒に語ってから、頑張ろうなあって酒飲まんばー、やー別にどうしあらんたら（友だちでなかったら）、えいさーも見に行かんやし、今日も言ったさ、暇やーたんばーよーって、だからわったーと一緒にエイサー見に行くの上等やし」

中里「たぶん、やー（おまえ）が思ってる信用ってのは、わーが思うによ、親子の関係ま

での信用までいってるばーよ、でも人間関係ってよ、わったーみたいのとかは、確かにやーが言ってるみたいに裏切りもある世界の友だち関係やし」

慶太「みんな裏切りしかないのに」

中里「でも人間て要はこんなもんやん（こんなもの）ばーよ（であるよ）、自分がさみしいから、この人のこと大事にすると思う」

慶太「ううん（違うぜ＝大事にしない）」

譲司「だーるぜ（そうだぜ＝大事にする）」

慶太「でも大事にされたい」

（同上）

中里は「裏切りもある世界の友だち関係」だからこそ、人を大事にし信頼することの重要性を述べ、慶太は「裏切りしかない」からこそ信じていては「負ける」と述べる。中里と慶太の意見は異なるものの、両者ともに自身が裏切りの世界を生きていることについては認識が一致している。深酒と喧嘩の果てに思わずこぼれた彼らの語りのなかに、その「世界観」を見てとることができる。基本的な信頼感をもたないまま、たまたま出会った地元の「どうし」（友人）のあいだの脆く壊れやすい関係性にすがって生きている様子をここに確認できる。

3.4 同級世代からの距離化と「男の強さ」

それまで何度も宴会などの場で酒癖を出してしまった結果、慶太も太一も地元の同級生つながりから孤立していく。

太一「だからわったー（私の）同級生、わったーと付き合いわんやし、一応、はっきり言って慶太もよ。」

譲司「だーるよや（そうだなあ）」

太一「同級生とあたらんさ、こんなの（酒癖）もみせてるから、同級生もひんぎってる（逃げている）。でもわったー、（気持ち）があついやし、好きさ。だからあんなささんけえて（あんなことさせるなど言って）から。これは悪いんだよとかって言ったりとか。」

譲司「でーじ（とつても）嫌われもんど、わったー同級生って、だから」

（同上）

また太一は、旧盆中に地元エイサー青年団の「用心棒」役として参加するものの、継続的に練習に参加するメンバーではない。ここからも沖縄的共同体に位置付けられるエイサー青年団から距離をとられていることを確認できる。補足すると、地元青年団は地元の芳しくない評判

から悪意でもって、太一と距離をとっているのではなく、格闘技同様に地道に練習するという習慣を持たない彼との不適合とみるのが妥当である。

このように交遊範囲も限定された結果、彼らはいつも同じメンバーで過ごすことが多い。そんななかでお互い励まし合う間柄を形成していった。

〔もう極力、道でケンカをやるのは辞めた方がいいですねえ〕はっ、もう何年もやってないから。〔そうですか〕全然やってないよ、やらん、やらん。言われた。〔お金とられますからねえ〕じん（お金）もとられるけど、自分のほんとの友だちに言われた、中里とか健二に言われた。慶太にも言われた。なんて言われたと思う？「おまえよ、うん、お前強いのによ、外でケンカしたりするさあ、やー自分（の評判を）下げてるだけとお、相手がケンカをうってくるんだったら、わかいんどー（わかるけどよ）、やー（おまえ）からいかんけー、しかばすめん（びっくりさせるくらい）はいいけど、ていーはくわーさんけー（手は出すな）。ていーくわーしーに一たら（手を出したら）、じん（お金）求められるどー」。

（太一、中里のアパート、2012年8月15日）

太一にむかってこのように忠告する中里は、以下のようにも語ってくれた。

中里「今よ、今やー（おまえ）が（慶太を）とめてる時代（時点）で、わーは逆によ、すごいと思ったよ。太一、やーにも言いたいし、みんなにも言いたいし、要はよ、男の強さってこんなじゃないばーよ。要は、ほんとは魅力を感じる男の強さっていうのは、けんかが強さだけじゃないばーよ。ケンカが強いのはごまんといる。やーよりばんばん強いのもいるよ」

太一「あたりまえだろ」

中里「こんなのじゃないばあて。あの名前なんだった」

譲司「勝也さんとか」

中里「勝也さんとかみてみ、やあ、あつたー（あいつ＝勝也さん）とか心が広いやし、人間がついていきたくなる人間やし。言っている意味わかるか。心技体やし、あれ、心も強い、体も強い。だからわつたーも、あの人のこと、こんなして言うけど、でーじ（すごく）優しくしてからこんなっていうけど、でもない場でも敬いのあれで言ってる、あの人はほんとにすごいんだよーって」

太一「やさしいな、どうしぐわー（友だちみたいに）、やさしい。『お願い練習付き合っって』って言ったら、絶対本気で付き合ってくれるばーよ」

譲司「まじでな」

中里「親身に思っやってくれるからな、だから人の強さっていうのはどこにあるのかな
ーっていったら、わーはこんなもんと思うわけよ、強い人間はごまんというやし。あん
し、プライド（格闘技団体）であれが最強やっさーと思っやたのが UFC（格闘技団体）
とか出たら殺されてるんばーよ」

譲司「うん」

中里「上には上がどんどん出てくるさあ。だからあれんばあよ（強さで頂点を極めること
はありえないんだよ）。しかも（だから）逆にくったー（こいつら）にはこんな気持ちを持
っやしてほしいな、俺は」

譲司「うん」

中里「これ（太一）が一般ピープル殺すのとか、簡単ぐわーやし、はっきり言っや」

譲司「やし、太一もあれやし、わったーには、むる（絶対に）てーださんやし、『死なす
ど（殴るぞ）』っていっやても死なさんやし」

中里「この辺のごろつきふーじい（みたいな）ので終わるなよっや話よ」

（沖縄市の居酒屋、2012年9月2日）

酒癖や繁華街における数々のトラブル（＝「武勇伝」）により、地元の同級生やエイサー団体
からも一定の距離をとられるようになった二人が、精神的な支えとしているのが、「男の強さ」
という規範であった。それは力の強さではなく、寛容さにある。このように地元の同級生から
避けられ、暴力が蔓延する世界に生きる彼らは、「男の強さ」に拠り所を求めながら生きている
ことを確認できる。

4 暴力と横取りの日常——〈ウットウ〉の視点から

4.1 上地

上地は、太一と同じ地元で生まれ育った27歳の男性である。2012年夏、彼は地元の建築業で
働いていた。彼いわく「2軍のヤンキー」の兄とは対照的に、自身は沖縄の同世代では有名なヤ
ンキーである。彼を有名にしたのは暴走族時代の、検問の強行突破、国道の逆走、スピードを
抑えないままのコーナー攻めといった数々の「偉業」である。彼は猛スピードバイクを荒々し
く扱う。その派手な運転はギャラリーや「ファン」たちに評判がよい。彼には、建築業で働く
父親と、建築現場の軽作業に従事する母親がいる。両親ともに朝早くから仕事で忙しかったた
めに、小さい頃の彼は叔母によって育てられた。そんな彼は小学校5年生から小型バイクに乗

り、万引き等を繰り返したという。窃盗で鑑別所に行ったことが 1 回あるが、暴走行為による補導はない。中学校は年間 15 回ほどしか通学実績がなく、バイクとスケートボードに熱中した。

自分もう、夜中もオートバイ乗ってたじゃないすか。[あーはい] もうなんか結局、学校が行けないんですよね。[行けないよね] うん。[ほいじゃあ、学校が嫌いっていうわけじゃなかったんじゃ?] うん。でも給食は食べに行ってますよ。

(上地、移動中の車内、2012 年 9 月 3 日)

中学生だった上地は地元の先輩に紹介してもらい、3 年生の夏休みに 1 か月間、地元建築業の「沖組」で働いた。

16 (歳) の時に、夏休みになんか (沖組で) アルバイトしてるんですよ。1 か月くらいやって、そのお金は先輩にとられたんですけど。[えー、容赦ないよね] シンナー吸うためにとられて、ホテルまで一緒に行って、自分はみてるだけ、シンナー吸って笑って、そのホテル代も全部自分のお金から。

(上地、北谷町の飲食店にて、2012 年 9 月 11 日)

彼は憤りや悲しみではなく、なかば諦めの気持ちとともに、初めての給料について話してくれた。以下の建築現場での仕打ちも同様である。

(建築現場で) 安全帯のフックみたいなのあるじゃないですか。(天井から) つるされて、めーまわったり、蹴ったりとか、(先輩たちはその様子を見て) 笑ってるんですよ、痛いんですけど笑われてるんですよ。これで若い人は逃亡するんですよ。

(同上)

彼は沖組からの「逃亡」を繰り返して、現在沖組で働くのは 3 度目である。その経験から、彼は逃げて帰ってこざるをえない状況にあることを痛感し、若い従業員に対しても理解ある態度で接している。地元で生きるためには、外部に訴えたり、現状を変えようとするのは、難しいし、「合理的」ではない。厳しい現状を引き受けたうえで、容赦ない先輩との関係をより

ましにすることに優先順位がある。このことを理解するために彼の建築業以外の就労経験をみよう。

中学卒業後、彼も厳しい建築業の世界に耐えきれず、仕事を辞めたり、内装屋、接客業、引越屋といった仕事を転々とした。そんななか、彼は2・3年間の交際をへてリカさんと19歳の時に結婚した。翌年には男の子が生まれ、その後も2人の女の子が生まれた。リカさんはキャバラ店に勤務し、家計を支えた。仕事を転々とする上地は、22歳の時にはリカさんと2人で愛知県の製造業で働いた。これが1回目のキセツ⁹⁾である。

[●●(社名)ってあれね。沖縄の人が多い?] 8割9割ぐらいは沖縄の人ですね。給料もいいですね。素人で9000円っすよ。全然、楽勝っす。汗もかかないです。

……

(内地は) 一人で行けないじゃないですか。なんかこの勇気がないじゃないですか。バカなんで、(電車の) 乗り方とかもわからんし……。

(上地、北谷町の飲食店、2012年9月3日)

1回目のキセツは仕事内容に関しては「楽勝」だったものの、リカさんと一緒だったからこそ働けたと話してくれた。実際、23歳の時に1人で向かった2回目のキセツ(自動車製造業)は仕事が大変で1か月で沖縄に帰ってきた。

なんかもう車の部品を作ってるんですけど、なんかこれ、ほんとになんか、遊ばれてる。車にほんと追いかけてまわされてるみたいで、もう走り、もう一人で。これはもう走ってるんですよね。朝から。馬鹿みたいに。汗だくで。

……

[もう1人ではキセツには行きたくない?] ああ、1人では行けないですね。自分も一応、さみしがりやなんで。

(同上)

これらのキセツ経験をへて、彼にとって沖縄を出て働くという選択肢はほぼなくなった。「やっぱり、この時(キセツなどの厳しい仕事をした時)になって、やっぱり中学校とか、ちゃんと学校行っとけばよかったなって。やっぱり、いろんな仕事してから気づくんすよね (同上)」というように、学校に行っていなかったことを後悔した。そんな矢先、彼は1か月分の給料を袋ご

と落してしまう。

仕事の帰りに、●●（社名）って、●●（地名）に金物屋あるじゃないですか。[うん] チェック付きのカバンのこっちに給料入れて、チェック閉め忘れてそのままオートバイ乗って帰ったら、ないんっすよ。1か月分の給料ないじゃないですか。[うわあ、けどそれは奥さん信じんだろ?] ひんぎった（持ち逃げした）って（言われました）。

.....

けどこの月のお金がないから、生活ができなくて、なんか、来月までどうするかって、ほんと米も食べれない時期があったんですよ。それで、実家行って、ご飯食べに行って、自分こんな生活（は）嫌だわけ。[はあ] やっぱり結局1か月給料なかったら、支払いもあるからどんどん、遅れていくわけ。[そうだよなあ] 子どもにもなんかこんな安い物とか絶対あげたくないから。

（上地、北谷町の飲食店、2012年9月11日）

リカさんとの共働きで、家計をまわしていた彼だったが、これをきっかけに生活は厳しくなった。そして、折悪しく現場で怪我までしてしまう。

踏んだのが45（ミリ）の釘だったら細いじゃないですか、65（ミリ）とか、これぐらいの太さしてますからね、これ自分、骨までいきましたよ。ジャンプしてから、ばーんって。[うわああ] 材料持ってる時に、急ぎだったから走って行って、ちょうど穴があいてたから、ジャンプして超えたんですよ、そしたら、くそっす。雨靴はいてるじゃないですか、足袋みたいなの。血の水なっていました。病院行って、入院って言われてたんですけど、この時に子ども3名生まれたばかりでお金がないじゃないですか、そのまま帰りますって行って。その日は麻酔なしで、やばかったっす。

（同上）

自らの入院を我慢してでも、彼は家計を支えることを優先した。当時の彼は「自分も（リカさんにキャバクラ嬢を無理やりに）させてるわけじゃないんですけど、お金関係（で家計を）手伝ってもらってるから、何も言えなかったんですよ（上地、中里のアパート、2012年8月16日）」と話すように、彼女の仕事への理解を示していた。ただ2人の生活の厳しさは極限状態が続いた。

4.2 離婚、DV、覚醒剤

その後も2人の生活は厳しい状況が続き、結婚6年目にして、彼とリカさんは離婚した。

自分が給料落としたのが、(離婚の)一番の理由。結局、浮気ってのは、最初のへんは、浮気2、3回やっても離婚はしないと思うんですよ。〔上地が浮気してたのね?〕はい、子どもがいるからとかじゃなくて、子どももったら、離婚するってのはあんまないんですよ。俺金もってないから、飯も食えないし一番、原因はお金で離婚する、沖縄多いんですよ。

(上地、北谷町の飲食店、2012年9月11日)

彼は離婚に関して、浮気が原因ではなく、お金の問題であるという。その後、彼はお金の問題(借金の完済)を解決して、彼女と再婚することが目標となった。そんななか、養育費を届けに彼女に家にむかった日に事件は起こった。

上地「子どもと会いたくて、家行ったら、玄関で『養育費ないなら帰れ』って言うから、かーっときて…。家閉められたんで、2階のベランダあがって、窓割って入りました。『殺されるー』って叫ぶから、近所でーじ(大変に)なってます。」

慶太「窓はやりすぎだろお前。」

裕太「(奥さんを)どんなしてくるした(殴った)?」

上地「警察、呼んでて来るのわかってたから、これでこいつとは最後だと思って、ちゃーくるしー(ひどい暴力)です。ボディも顔も。」

裕太「何発入れた?」

上地「10発くらいです。」

裕太「は一、お前バカか。」

健二「(家行ったら、奥さん)鼻血出てたよ。」

(建築会社事務所、2012年8月16日)

でもやっぱり、バーンって怒ったら。あんま、普段、(自分は)手ださないんですよ。自分で決めたんすっよ。もうどうせ最後だから、ガラス割って。なかに男の人もいると思っ

て。[ああー、そうなんだ] この人も殺すつもりで、[男の人を殴るつもりだったんだ?]
(ドアを) 開けないってのが、珍しいんすよ。養育費を持ってきてるのに開けないって
のがおかしいじゃないですか、ぜったい中にいるって。殺すって(気持ち) だった。今で
も言っているんですよ。(留置場) 出てきたときに電話して、お前には何もしないけど、な
んかとられたのが、なんか負けた気分で嫌なんすよ。男は戦いだからよ。ヤンキーは殴
り合い戦争じゃないですか。それで覚えとけよって。[男にね。離婚してもその奥さんにせ
まってくる男には、やっぱわじわじ(イライラ) するんだ?] なんか……、なんか、自分
は借金とかもあるじゃないですか。[うんうん] 借金、返し終わったら、来年に帰ってくる、
来年の2月までに借金返せたら、一緒に戻ろうねって話をしてたんですよ。[そうなんだ]
そんな2人して話して、約束したのに、裏切られてるさあね。[うんうん] 彼氏もできて、
なんかめっちゃ、イライラしてから、家もほんと放火してやろうと思いました¹⁰⁾。

(上地、北谷町の飲食店、2012年9月11日)

彼は暴行、器物損壊等で、逮捕された。私は上地の先輩から要請を受けて、二拘留^{ふたこうりゅう}(23日)
中の面会が可能な13日のうち12日面会にむかわせてもらった¹¹⁾。留置場を出て、彼はかつて
覚醒剤を使用していたことを打ち明けてくれた¹²⁾。

[最初のきっかけは?] きっかけは、やっぱ離婚して(精神的に) 病んでて。

……

たまにほんとにクスリ(覚醒剤) 触って、何も考えたくない。クスリ触ってたら、結局、
何も考えないんすよね。怖いものも無くなるし。

(上地、移動中の車内、2012年9月3日)

結局、みんなは、やー(おまえ) ストレスないだろうってよく言う。いつも笑顔だから、
おしゃべりしてるから、ストレスないだろうって。家帰ったらやっぱ考えますよね。眠る
前とか、一人なった時とかに。[ああ] めっちゃ、めっちゃ考えてますよ。たまに、だから
クスリ触った時とか、ほんとに何度も死にそうになったとき、[ええ?] 何回も死にそうにな
ったときありましたよ。もう、家ついてから考えごとし過ぎて、もう呼吸困難みたいな。

〔自殺なるやし。おまえ〕ほんとにやばい、やばいぐらいだった。わざともう、自分で、もう考えたくないから。こんな時何も考えないんですよね。〔おお〕もう、また、何回も（覚醒剤を）入れてから。何回も入れて。量多く入れたら、人間って限度ってものがあるじゃないですか。〔おお〕もうやばいっすよ。〔もう駄目よ、そんなことしちゃあ〕で、これで何回も、あつて。やっぱ子どものこととか考えないじゃないですか。余計ほんとに（気分が）落ちるんすよ。

（同上）

離婚後のさみしさに耐えきれず、上地は覚醒剤に手を出した。彼は2012年当時、若者に流行していた「ハーブ」ではなく覚醒剤を選んだ。これはハーブが落ちている気分をより落とすのに対して、覚醒剤は落ちている気分を忘れさせてくれたからという。離婚直後の彼は直面したくなくても直面せざるをえない孤独やさみしさを落ち着かせるために、「精神安定剤」として覚醒剤に手を出した。

4.3 共同体からの排除と暴力的な「地元つながり」への再包摂

その後、上地が覚醒剤をはじめたという噂が、生まれ育った地元で知れ渡るのにそう時間はかからなかった。その結果、彼はますます孤独に陥っていった。

（地元の）友だちが、なんか避けていっていつてるのがわかるじゃないですか。〔そうか〕みんなの目とかが、自分たちが、こんなして友だち2人そろって連れてても、やっぱ気付かないふりされたり、友だちとかが、もう嫌だなあつて。

……

ファミマとかだったら、結局、あっちみんなで盛り上がってるのに、自分が現場号でいったら、いきなり買物^{かいもん}して出てきたらみんないないとか。〔うん〕あきらかに、自分が薬物してるから、あいつと歩くなみたい。あいつとやってたらなんかされるぜーって。

（上地、北谷町の飲食店、2012年9月11日）

しかしそのような彼の覚醒剤使用に歯止めをかける出来事があった。それは地元暴走族の〈シージャー〉たちによるやや強引な働きかけであった。〈シージャー〉たちは、上地の意見を聞くことなくほぼ強制的に彼を自らのパシリとする形で覚醒剤から引き離した。

子どもも会いたいだろ？俺もそうだからわかる。いつか会わしてくれるから、それまでは

(奥さん、子どもに会いに) 行くな。バイクなんか買わんで、子どもの誕生日プレゼント送れ。そしたら子どももお父さんってわかるさー。子どもも会いに来るさー。絶対会えるようになるから、それまで我慢しれよ。な。

(太一、留置場の面会室、2012年8月15日)

(先輩の裕太との電話にて) あのーなんねえ、今日もラストの面会行くかあっていってから、上地の面会、自分も行ったわけよ、●●署と一緒に行ってからに、一応、元気そうではあったんだけどよ、でもあれだねえ、裕太さん、出てきた後の上地(の面倒を)みないといけないんじゃない、自分なんかだよ、だから。これ逃げたら、人生終わるさーねえ。もう次はないから、だから俺が言うから、絶対。明日。明日は明日で仕事、今日はたまたま休みだったかもしれんけど、仕事だけど、一応は仕事終わった後に、絶対こっち来いよって言うてるから、あれ、いってーあびらんと(一度、怒鳴らないと)いけんよねえ、でーじ(強く)怒る人がいないとつぶれると思うわけよ、あれ。ほんとねえ、ほんとにねえ。心配してくれてる先輩がいるのに、こんなしてるの?大変だねえ。あーごめんねえ、裕太さん、お疲れさまでした。

……

(電話を終えて) おまえが怒らんと誰もきかんって。やっぱり、裕太さんも言いよった(言っていた)。やーが怒らんと、きかんよーって。なめてるからよ。わったーやし、しに(強く)更生して欲しいやし(のよ)、あんなやしがー(だけど)、あれがその気がないんだったら、わったーからしたら、バカらーさいさーね、バカみたいさあね。仲間がいなくなったとき、さみしいよ。[そうですねえ] 大変ど、その時の仲間っていうのは、悪い仲間しかいないからさ、わかるでしょ、打越さん。

(太一、中里のアパート、2012年8月15日)

上地が出所した日の夜、太一、中里、そして私は、上地の出所激励会を催した。太一も留置場に行った経験があるため、その話題で盛り上がった。

太一「(留置場に行ったことは) 社会勉強よ」

中里「社会勉強には、なってるよ。やーは、ちょっとはこの行く前とは、ちょっとは気持ちちは違うはずよ」

太一「でもさ、慣れって怖いわけよ。人間よ。今出てきて、今日出てきてるんでしょ。この気持ちは、常に初心に戻って1回、戻った方がいい、もし1回よー、また一応慣れるばあよ。わーやて(俺だって)3年くらいあんま(あそこ)から離れてるからよ、あれ

やっさー（あれだな）と思って、初心に戻るような時の気持ち。一回バカなった時とかあるさー、これから先よ、やー、あれはないからよ。次はないからよ」

上地「はい」

太一「わかってるさあ」

上地「はい」

太一「もう次なんかちょっとでも悪いことしたら、はっきりいって、すぐ刑務所」

上地「（留置場の担当者が）すぐ警察って言ってました。気持ち変えないといけないです」

太一「ほんとよ、えっ」

（中里のアパート、2012年8月15日）

太一「いろんな社会勉強してから、大人になれよ、上地」

上地「また第2の人生歩みたいっすね」

太一「わー（おれ）もだよ上地、上地、頑張ろうな。わーもど」

上地「どっかがおれないとダメですね、趣味変えたらいいのかなあって思うんですけど。」

太一「まだバイク（は）ましよ。わーより。わー酒な。ふらー（バカ）なってるさ。」

中里「一応よ、わーは思うけどよ。やー（おまえ）はよ、人間が生まれた欲でやし、ぬーよらあ（なによりも）、誰かのために辞めるとかて、こんなのって、相当なくんち（根気）とかこんなのがないと無理やし、ましてや女と、女ははっきり言って、女は奥さん、1回は結婚したかもしれんけど、他にもいるやし、一応子どもはかえらないけど。だから、よ。あれやんばあよ（あーなんだよ）。離婚しれとは言わんけど、要はるー（自分）にあった女は世の中いるよ」

太一「いるよ。だから上地、上地、切り替えて、子どもは子ども、繋がってる。」

上地「はい」

太一「やーのこともっと、やーのことを、やーをたてる女はもっといる、探せ」

（同上）

太一と中里による激励は、上地も言うように解放された喜びを感じ、同様の経験をした〈シージャー〉からの激励の言葉に勇気づけられる場となった。しかし、同時にそれは留置場や罰金刑の支払いのための労役場と比べてもそれほど違いのないほど、〈シージャー〉からの厳しい仕打ちが待ち構える建築現場への復帰であった。仕事に復帰した月曜日の午前中、彼はさっそく現場で〈シージャー〉に痛めつけられたのだった。

4.4 〈ウットゥ〉として生きる

上地は家計を懸命に支えようとした。若い頃は沖組を逃亡したものの、キセツに限界を感じると、建築現場で厳しい仕打ちにあっても我慢して働き続けた。懸命に支えた家族との生活が壊れ、さみしさから覚醒剤に手を出し、元配偶者にも暴行を働いた。そしてまた地元の〈シージャー〉が待つ建築現場に戻った。

みんなは、「絶対、まだ（自分が）覚醒剤やってるだろう」って、仕事でなんか、ずっと黙ってるから、いつもうるさいじゃないですか、しゃべって、「やってるだろうって、やあ（おまえ）くるすよー（殴るぞ）って、嘘つかんけえ（つくなよ）」って。〔やってるから、くるされるん？やめろって意味なんか、それは？〕嘘つくのが・・・。〔嘘つくのがまずいんだ？〕やるのはいって、やるのはいいけど、嘘つくのが嫌みたいです。

（上地、北谷町の飲食店、2012年9月11日）

彼が覚せい剤の使用を絶ったのは、地元の〈シージャー〉によるやや強引な働きかけであった。覚醒剤の使用による身体的な弊害や、行政処分を受けるリスク、社会的信頼を失うことによる将来の不安などよりも、地元の〈シージャー〉の関係の悪化を気にしている。嘘をついて、地元の〈シージャー〉から制裁を受ける、もしくは信頼を失うことが、一般的に考えられる覚醒剤使用にともなうリスクを上回っている。つまり、よりよい選択肢としてではなく、覚醒剤使用による無断欠勤や嘘をつき〈シージャー〉からの仕打ちを回避するために、消去法として覚醒剤使用を絶ったことがここで重要である。

ここから明らかなように、彼にとって地元を出て生活することははなから想定されていない。彼は地元生まれ、地元の先輩や後輩とともに地元で育ち、そして地元で働く。このような過程をへて、彼は自らの〈ウットゥ〉としての立場を確立していく。彼にとって地元で生きるとは、〈ウットゥ〉という役割をまっとうすること以外には考えられないことである。

5 沖縄的共同体の外部

5.1 〈シージャー〉－〈ウットゥ〉関係

ここまで〈シージャー〉の太一たちのグループと、〈ウットゥ〉として生きる上地の生活史を簡単に紹介した。〈シージャー〉の太一たちは、繁華街や同級生から距離をとられ、お互いに裏切りを予見しつつも、それを前景化させないかのように「本当の男の強さ」を前面に出していた。上地は〈シージャー〉からの暴力と、地元の友人から排除された孤独な世界を生き、そこで生き抜く戦術を〈ウットゥ〉として生きる方策に見出そうとしていた。しばしば暴力事件をおこし、地元社会で疎まれる太一たちが沖縄的共同体の外部に位置付けられる過程に加えて、

上地が孤独やさみしさから強引に〈シージャー〉－〈ウットゥ〉関係につなぎとめられた過程は、沖縄の共同体のありようを把握するために有効である。このように、太一と上地は、沖縄の共同体の外部で〈シージャー〉－〈ウットゥ〉関係を維持しつつ生きている。

5.2 沖縄的共同体論再考

ここまで、太一や上地が生きる沖縄的共同体の外部と、その〈シージャー〉－〈ウットゥ〉関係について説明してきた。最後にそのことの社会的含意について確認する。

谷富夫は沖縄的生活様式を、(1) 自立主義、(2) 家族主義、(3) 相互主義として特徴付けた(谷 1989: 293-4)。自立主義とは、所与の条件と各自の力量に応じた手職の獲得の意思と能力のことである。また家族主義とは自己の生活がある程度犠牲にしてまでも家族規範に従う行動様式のことである。最後に相互主義とは、家族を含むもっと広い範囲の第 1 次集団内での相互扶助の原則である。そのうえで、谷はそれぞれの有無の組み合わせで類型化を試み、本土就職と U ターンの移動の説明を試みた。

ただ本稿で取り上げた若者たちは沖縄的生活様式のどれをも持ち合わせていなかった。太一は独立の見通しを持つものの、独立に慎重である¹³⁾。上地は 23 日の留置期間中に家族による面会はなかった。また太一と父親の関係にも家族主義は確認しがたい。最後に、太一と中里の共同生活は 3 か月で崩壊した。また慶太と中里が言うように、彼らが生きる世界は信頼感にもとづくものではなく、裏切りと表裏一体である。そこに相互主義は読み取れない。それは地縁・血縁にもとづくわけでもなく、また調和的な互惠主義でもなく、むしろ暴力にみち、いつ裏切られるかもわからないつながりである。ここに沖縄的共同体の外部を確認できる。

彼らはみな、帰るべき実家や家族もなく、結婚生活は破綻し、いちどは警察の厄介になっている。日雇いの仕事を細々と続け、同じようなアウトローの仲間たちと、暴力を含んだ過酷で一時的な関係性をかろうじて保っている。彼らの下層／不安定層としての生活には、「沖縄的共同性」のセーフティネットも届かないようである。

[注]

- 1) 地元の暴走族、建築業、人間関係を拠点として生きる若者サブカルチャー。
- 2) 正式名称はサラリーマン金融。法定利息を上回る無届け無店舗型の金融業である。
- 3) パチンコ店関係者やその知り合いなどに雇われて代理でパチンコを打つ仕事。
- 4) 建築現場の足場を組む、もしくはそれを解体する仕事。高所での作業、仕事のきつさから「現場の王様」と言われる。
- 5) 女性従業員が飲食を提供し、会話を楽しむ風俗店。性的なサービスは一切禁止されている。

- 6) 女性従業員の胸への接触などの性的サービスを提供する風俗店。
- 7) この年齢にもとづく上下関係は、一般的なものより過酷である。たとえば、〈シージャー〉たちは〈ウットゥ〉を「兵隊」と呼ぶことがある。「兵隊」は買い物などの単発の指示に従うだけでなく、丸一日バイクを研磨したり、深夜の代行運転などを行う。また宴会などの集まりでは〈シージャー〉が帰るまで解散しないローカルルールもある。ある会合で釣りに行った際、〈ウットゥ〉たちは真夏の炎天下の屋根もないテトラポットで 24 時間にわたり餌の交換などを手伝ったケースもある。
- 8) 人夫出しともいい、主に建築業労働者の斡旋をする者である。
- 9) キセツとは、数か月から半年の間、沖縄を出て住み込みで働く就業スタイルの若者による呼称である。語源は「季節労働」である。
- 10) キャバクラ嬢として働いていたリカさんへの理解、つまり客からの性的な言動をある程度認める「寛容な態度」は、ここでリカさんに手を出す男性への「殺意」へと変化する。
- 11) 留置場の面接は、1 日 1 組と限定されているため、調査者は毎日面会の最終時刻に合わせて面会を実施した。
- 12) 2013 年春、筆者は上地の自宅にて家族とともに生活し、建築業の同じ班で働き、週末は一緒に飲みに行くという 2 週間の住み込み調査が可能となった。この 2 週間の彼の言動から、彼は覚醒剤の使用を完全に絶っていた。
- 13) 「将来的に独立したいですか？」やろうとしたらできる。けどさあ、この独立した従業員の家族の面倒もみれるかーやんばあよ（なのよ）。仕事がないってなってからよ。こんな会社あるさあ、公務員でもないからさ。もしできなかった場合、この世の中、仕事がないやし、[はい] はっきり言って、内地でもないさあ、いつなくなるかわからんさあ。こんなこと考えたら、まだ雇われみー（の身分）がまだいいのかなあって。（従業員の）家族も含めて、子どももいるさあ。みんなも食べさせていかんといけんさあ、こんなの考えたら、一歩踏み出せん。いっぱいいるよ、今までいっぱいみてる。こんな、給料も払わんで、トンヅラして、逃げてる社長いっぱいみてるわけ。そんなのできるわけないよ。

（太一、中里のアパート、2012 年 8 月 15 日）

【文献】

- Durkheim, Émile, 1893, *De la Division du Travail Social*, Paris: Alcan. (=1989, 井伊玄太郎訳『社会分業論 上/下』講談社.)
- 岸政彦, 2013, 『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版
- 谷富夫, 1989, 『過剰都市化社会の移動世代——沖縄生活史研究』溪水社.
- Toennies, Ferdinand, 1887, *Gemeinschaft and Gesellschaft*, Leipzig: Fues. (=1957, 杉之原

寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念〈上〉〈下〉』岩波書店.)

打越正行, 2011, 「型枠解体屋の民族誌——建築現場における機械的連帯の意義」『社会学批評』別冊: 21-44.

——, 2013 (印刷中), 「建築業から風俗営業へ——沖縄のある若者の生活史と〈地元〉つながり」日本解放社会学会編『解放社会学研究』26: 35-58.

Willis, Paul E., 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Gower Publishing. (=1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗、労働への順応』筑摩書房.)

八木正, 1987, 「沖縄からの出稼ぎの動向と特徴」渡辺栄・羽田新編『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会, 257-67.

芳澤拓也・上間陽子, 2008, 「沖縄の若者をめぐる労働市場の現在と相互扶助ネットワーク」『現代と教育』76: 70-82.

——, 2009, 「沖縄の20歳の生活状況・条件の概観——全国・沖縄・沖縄地域内の比較を通して」若者の教育とキャリア形成に関する研究会編『「若者の教育とキャリア形成に関する調査」2007年第1回調査結果報告書(研究代表者: 乾彰夫)』(<http://www.comp.tmu.ac.jp/yicsj2007/dl/yicsj2007rep01.pdf>, 2011.8.13), 153-66.

【謝辞】

ウチナーグチ(沖縄方言)については、翁長久弥氏にアドバイスをもらいました。また本稿のもととなった調査は、龍谷大学人権問題研究委員会から研究助成を受けました。最後に本稿で取り上げた若者たちは、快く調査を引き受けてくれました。これらの方々に心から感謝申し上げます。

(うちこし・まさゆき 社会理論・動態研究所)